

小出家住宅保存更新計画

- 個の愛着と建築の保存行為の探求 -

地域住民個人が持つ価値の保存について

建築に対してほんの少しでも意識を持ち過ごしてきた人と、建築に対して一切意識をせずに生活街での生活では、街の見方が変わり、さらにその中でも建築に対して価値を感じる感覚が全く同じ人はいないだろう。

- ・ 縁
- ・ 共に過ごした時間・体験
- ・ 財産
- ・ 資本を生み出す場所

など、目に映るものや連想・想像するものは人によって違う。

その建築が自分にとってどんな存在なのか、どんな価値があるのか、建築1つ1つがどんな用途を持っているかは、同じ街や建築空間で過ごしてもそれぞれ違う判断になる。

。

写真や思い出の品を残すように、個人が持つ建築や街に対する小さな価値を少しでも保存できる環境はどんなものなのかと問うことから設計が始まった。

街全体の保存について

現在の名古屋市の街はものすごい速さで更新されている。

名古屋駅付近、栄、補強工事が続く名古屋高速道路が例として挙げられるだろう。それら変化するものの多くは効率性を重視しビジネス的な観光資源やオフィスビルになることが多い。

名古屋市は日本でいう京都など、世間一般がいう歴史的に重要な都市として扱われ、街並みに価値をつけられてきた場所と比べると街並みや建築を活用されている様子が表に出ない。他地域に比べて非効率への許容が狭いと感じ、必要とされなくなるとすぐに効率重視の施設へと変わってしまい、メディアはそれを嬉々として報道している。

しかし、建築を学ぶ者としてその事について否定することが正解ではないと考える。都市が成り立つためには地元住民はもちろん、他地域住民が過ごすための効率性は非常に大切な事柄であるだろう。加えて、名古屋市内での建築保護活動は確かに存在しており、東区の文化のみちや、緑区の有松が保存地区として指定されているのが代表的な例である。

日本、もとい愛知県には残すべくして残されてきた建築がたくさんある。それらの多くは歴史的価値や、あるジャンルで見出された高い価値など、にされた価値によって保存が実行された。それら全てが必ずしも保存されることはなく、今でもたくさんの議論が重ねられ消失と保存がくりかえされている。

しかし、その議論の題材にもなり得ないと言われしまう建築は数多あり、自分達が暮らすこの街の風景一つ一つにも価値は存在するだろう。大衆には知られていない街に溢れかえる個々の価値…「家族と暮らした」「学生生活での多くの時間をここで過ごした」など、プライベートで距離が近い、あるいは思い入れのある建築ほどスクラップアンドビルドに対して様々な感情が生まれる。それと同時に、自分の中で不可視な価値が生まれ、言葉に表し難い保存欲求が芽生える

建築の保存について

昔から馴染みのある建物が突然取り壊され、姿を消して全く新しいものになることで記憶映像が切り替わり、「古い」と「新しい」の境界線が生まれてゆく。「昔はこうだった」と言われるその基点はそれら建築の入れ替わりであり、それを当たり前に受け入れてきた。

古い建築と新しい建築の共存を極端に表していると感じるのは、ダイビル本館やホテルロイヤル クラシック大阪や銀座歌舞伎座などの腰巻ビルである。下層部は古いファサードをそのまま残しつつ、新たなビルを増築して新しい建築として生まれ変わる。しかし私はどうしても既存のファサードと新しいデザインのギャップに違和感を覚え、魅力を見出せない。直近で変化を体験していないからなんとも言えないが、古いファサードから一気に 20 階ほどのビルができるのは不自然だと感じた。

名古屋市中村区稲葉地にある名古屋市演劇練習館、通称「アクテノン」は最初配水が目的の配水塔であったが、ポンプ圧送による水供給が可能となったため、わずか 7 年で役目を終えた。それから約 20 年間は名古屋上水道局倉庫とされたが、一区一図書館政策により図書館へと役目を変えた。しかしその 21 年後、図書館としての使用性が問題視され再び空き家となったが、1992 年に演劇練習場として転用され、配水塔→倉庫→図書館→演劇練習場と、建築はそのままに多くの利用方法でその場にあり続けた。ファサードの変化はないがプログラムがグラデーションのように変化していく様子が、見た目の記憶映像だけにはとどまらない大切な要素を持つのではないかと思った。

記憶映像の多くの割合はファサード同士の繋がりが占めている。しかし、その中でもプログラムや地域コミュニティなど、昔から馴染みのあるものも記憶映像に影響を与えているのは確かだ。人が生まれてから現在まで過ごし記憶を重ねてきた街や建築は、いわば「愛着のある道具」。それらが古くなっていく過程を知り、それらが成長していくことに愛着を覚え、大切にしたいという思いが芽生える。

物の保存について

そこで実際に人の手によって使われる道具や生活に溶け込んでいる物が、どのように使われ保存されているのか、人の手によってどのように変化し生活に影響していくのかを観察し、「道具に愛着を持てる条件」や「それらを建築に落とし込むための要素」を拾い上げようと試みることにした。

本の保存をするブックカバー、食品の保存をする容器、固体あるいは液体石鹸など、約 50 種類の事例を比べた。

本一冊の保存でも

- ・ブックカバー
- ・保護シール
- ・データ化

など、技術の進化で多様な保存方法がある。

の変化する様子や人が保存物へ与える事柄を観察した結果、プロダクトスケールであると、スケールが小さいためか、建築に比べて保存行為の柔軟性を感じた。

建築もプロダクトもデザインされ人に使われることを主な目的とされるモノであるが、持ち運びが容易であることなどから愛着も沸きやすく、良い点も悪い点も見つけやすいことがわかった。

小出家

昭和40年 竣工

昭和59年 2階木造部分増築

道沿い庭を駐車場に工事

平成2年 離れ 竣工

保存行為 - 保存項目の抽出 -

ヒアリングをして保存項目を抽出する。

以下の項目が抽出された

- ・ 裏へ続く石畳の通路
- ・ トイレから見る外の空気感
- ・ 門の音
- ・ 家を介さず庭にアプローチ
- ・ 和室とリビングの段差
- ・ 家計はほぼ一緒だが別の家の距離感
- ・ 道沿いの軒下
- ・ 隣の部屋から自分の部屋越しに見る外の明るさ
- ・ 階段を上った後の空の色と階段を下る前の空の色
- ・ 父とテレビとソファとおかしと孫の手
- ・ 客と小出家それぞれの玄関
- ・ 木枠の模様入りのガラス

父は小出系住宅と共にしていた時間は長いが、学校や仕事で寝食しかしていなかったため、空間的な愛着はなく、プロダクトスケールの物が主な保存項目として挙げられた。

母は生まれてから半生を実家で過ごし、これまでを小出家住宅で過ごしている。そのため小出家住宅を客観視し、他にない特徴を保存項目に多く挙げた。

自分は生まれて幼い頃までは別の家で生活していたが、小出家住宅と同じ町内であるほど家が近距離であったことから、敷地は離れていても共に過ごしていた感覚があった。

成長してからは、忙しい学生生活の中で自邸を拠り所にしており、ふとした時心地よいと感じる風景を主に保存項目に挙げた。

保存行為 - 関係図 -

保存行為 - ドローイングで項目の抽出 -

。

保存行為の探求

今回の設計では、建築が新しくなる過程で本来保存されるべき個の愛着からくる小さな価値を失うことを防ぐため「保存行為」を探求する。

自身との距離が近く、関係値が測りやすい自邸である小出家住宅を設計対象とし、現在の姿を保存行為を行うつつも、新しい建築として設計する。

今回行う保存行為は以下の4つである。

- ・ヒアリング
- ・ドローイング
- ・関係図の作成
- ・設計

まずは現在の家に住む父、母、自分に対しヒアリングをして、保存項目を抜き出す。

そして保存項目がどのような要素で構成されているのか、どのような関係であるかを保存行為をドローイングや関係図の作成をして具体的に可視化をすることで、新しい建築として設計する1つの絶対条件を定める。

保存項目の具体的な要素は必ずしもモノではなく、音や関係性など、不可視なものもマテリアルの1つとして考慮する。住人、建築、物、音、関係など、住宅を取り巻く要素は敷地外であっても対象である。

それらを経て保存項目を既存から抜き出し、保存項目があることを前提に設計を進めていく。

既存から姿を変え、新たな建築として姿を変えても。保存行為が生きている設計を計画した。

新たな小出家住宅に必要なもの

新たな小出家住宅とするとき、駅近であることなどから、賃貸機能を付け加える案が上がった。そして退職後自分の時間を作るため、夫婦作業部屋を設けることにした。

新たな住宅に付け加える要素をまとめると以下の2つである

- ・ 賃貸機能
- ・ それぞれの作業部屋